

どれみなのはなし

そのじゅうに



おかしなわたし

春は過ぎたけど、たまにちょっと寒いときもある、5月。学校が終わると、わたしは、いつもの通りMAHO堂へ歩いていった。

公園をちよつと入ったところにある、MAHO堂。何年も見てるはずなのに、いつ見ても、なんだかほつとするわ。

アメリカに戻ったときも、そうだったな。まわりのたてものは変わっても、ここだけは2年前のままだったっけ。中にはマジヨモンロー——じゃなくてマジヨバニラさんまでいたし、ね。

わたしのポケットには、バニラさんからもらった白いカギがある。世界にたったひとつしかない、このMAHO堂のカギ。

わたしのいまの生活は、このカギと一緒ににはじまっただ。

MAHO堂に入っすぐ、カレンダーの5日のマスにバツテンつけてから、わたしはいつもどおり、エプロンつけてキッチンに立った。

まだ洗いかごに入ってるボールに泡だて器。来る途中で買ってきた、たまごにフルーツの缶詰。それに棚の中から小麦粉と砂糖。テーブルの上に通りそろえてから、わたしは冷蔵庫の中のケーキを出した。

ここところ、お昼はいつも前の日に失敗したケーキ。あんまりおいしくないけど、しかたないよね。がまん、がまん。

このマジヨモンローのMAHO堂を、また使うようになつて1年。3日に一度はこうしてお菓子作ってる。ほんとに、いつものこと。だけど、このケーキ、うまくいかないな。そんな難しくないはずなのに。

粉っぽいケーキほおぱりながら、ちらっと目に入っ

3 おかしなわたし

てくるのは、奥のとびら。去年ハナちゃんが、ここと美空町と大阪のMAHO堂をつないじやった、とびら。

いまはもう開かないけど、声だけは届いてたんだ。

5日前までは。

立ち上がって近くまで寄って、コンコンって叩くとして、手が止まっちゃった。また、なんの音も帰ってこなかったら、さみしいもんね。

『モモ、来たよ』

声がして振り返ったら、MAHO堂の入り口から顔がふたつ、のぞいてた。

いっけない。カウベルの音も聞こえないなんて。ちよつと、ぼーっとしてたみたい。

『いらっしやい、ベス あ、サチコも来てくれたんだ』

「こんにちは、ももちゃん」

日本人のサチコは、ベスの親友。アメリカに来てから紹介されたんだけど、実は前に会ってるんだよね。

「こんニチはア」

へへ。サチコは、わたしには日本語であいさつするんだよね。だから、わたしも日本語で返すことにしてるんだ。

「え？ももちゃん。なんだか言葉？」

あれれ？まだときどき日本語と英語まざっちゃってるみたい。2年も日本にいたのにね。

『モモがしゃべる言葉って、英語か日本語かときどきわかんなくなるわ』

こんなとき、どれみちゃんだったら「わかればいいじゃん」とか言うんだろうな。

『あは、しかたがないわよ。わたしとベスが一緒にいるんだもの。どっちに合わせたらいいのかわからないんですよ？』

あいちゃんなら、なんにも気にしないでそのまま

話しちゃうだろうし

『モモ?』

うあー! ああ、いつの間にか、目の前がベスの顔でいっぱいになってるわ。

『また? 最近多いよね、ぼーっとしてるの』

だめだめ。ちゃんとしなきゃ。うん。

『だいじょうぶ。ふたりとも入って』

『モモ、Happy Birthday!』

パン! って勢いよくクラッカーが鳴って、わたしの手にプレゼントが乗せられた。

そう。今日は5月6日、わたしの誕生日。

わたしは「ありがとう」を英語と日本語で言うてから、頭を下げた。

『なんにもなくて、ごめんね。何度やってもうまくケーキ焼けないんだ』

笑いながら言ってみたけど、なんだか泣きたくなくなってきた。あーあ、なんで焼けないんだろう。

『誰でも調子悪いときはあるんだから 言うてくれれば、ケーキくらい持ってきたのに』

ベスが心配そうな顔してる。ああ、顔に出ちゃってたんだ。

『いいよ。どうせ月に一度はケーキ焼かないといけない約束だもんね』

肩をすくめて、目をちよつと細めて。これでちよつとは、笑って見えるかな?

『ここを使わせてもらう条件なのは知ってるけど。でも、なにも自分のパースディケーキまで作らなくてもいいんじゃない?』

サチコの言葉に、ベスが思いつきりつなずきながら、わたしの手を取った。

『最近、学校でも考え込んでるでしょ? そんなに大変なら、私たちも手伝』

最後まで言う前に、わたしはベスの口に指あてた。

5 おかしなわたし

うれしいけど 7月のどれみちゃん誕生日も、9月のぼつぷちゃんの誕生日も、そのあとだって。毎月ひとつづつ、ひとりで頑張って作ったんだもの。一年くらいで、あきらめられないよ。

『ジュースとフルーツ缶はあるから、それだけでも食べてっよ。 ええと、ちよつと待っててね』
わたしはそのままキッチンに行つて、水を張つたボールに顔つけた。いまだけ、普通の顔にもどらなくつちやね。

ベスたちが帰つてから、わたしはまたケーキ作りはじめた。

誕生日だから、っていうだけじゃないわ。月に一度、心をこめたケーキ それは、マジヨバナラさんとの約束だから あ、スポンジ焼けた。

このMAHO堂には、マジヨモンローの想いがし

みついている。いいかげんなお菓子作りしてると、調理用具が飛んでくるくらい

シャンシャンシャンッ！

そう、こんな風に、ボールのまわりで泡だて器があはれたりするもんね。それじゃ、ボールを氷水につけて、クリーム混ぜ込んで、と。

このままじゃお化け屋敷になつちやうから、って、バナラさんが取り壊そうとしてたところに、わたしが来たんだっけ。

週に一度は必ずいるから、って言って、無理に使わせてもらえるようにしたのはわたしなんだ。そのときの条件が「お菓子作り」。

毎月ひとつ、このMAHO堂が満足するような、心をこめたお菓子をわたしが作ること。そんなの、簡単だと思つてた。もらつてくれる人の笑顔を思い浮かべれば、それだけで心がこもるから——でも、でもね。

しほり袋にチョコクリーム入れて、薄く伸ばした白いマジパンに、ゆっくりチョコしほり出してく。
 “Happy Birthday”——そこまで書いたけど、しほり袋にぎってた手が軽くなった。

「心をこめて書けないヨ 自分の名前なんて」

カタン

ん？ あれ、まわりが暗いな。そっか、あのまま寝ちゃったんだ。 そっいえば、いまなんか音がしてたよね。

立ち上がったて、あかりをつけて。まぶし え？

だれか、いる??

「だ〜れだ?」

あれ、日本語? それに、この声

「ど、どれみちゃん!?!」

丸いお団子の頭、まんまるの大きな目。本物の、ど

れみちゃん

「あつたりい〜。へへ、びっくりした?」

「あ」

目の前が、ゆらゆらしてる。よく見えないよ

「ど、どうしたのももちゃん、いきなり泣い う

ああー!」

なぜかわからないけど、涙が止まらないよ。抱きついて、声上げて ああ、恥ずかしいけど、もういいや。

「ああ、ちよ、ちよっと あいちゃん、たすけてえ〜」

「泣きたいんやったら、思っきり泣いたらええやん。その間に、あたしら準備しとくわ」

あいちゃんの声に、ほかのみんなが応えてる。みんなが、いるんだ。

わたし、もつとぎゅつと抱きついちゃった。

「泣くのはいいけどさあ ももちゃんの胸、あたしより大きいよお」

7 おかしなわたし

「まあまあ、ちよつと見ないうちに背が伸びたわねえ」
涙が出なくなつてからちよつと顔上げたら、大きな影が見えた。あれ？この声　!?

「リリカおばあちゃん!？」

「そつだよ。あたしたち、リリカおばあちゃんにつれてきてもらつたんだ」

いつもの帽子に黒い服、やわらかい笑顔　何年ぶりだろう。ほんとうに、リリカおばあちゃんだ。

「とびら越しにあいちゃんと話してたらね、いきなりとびらが開いて、『アメリカのMAHO堂に行くけど、一緒に来る?』って言われたのよ」

はづきちゃんが苦笑いしてる。あはは。びつくりしたみんなの顔が目には浮かぶわ。でも

「それなう、来る前に知らせてくれればいいのニ。5日もいなかつたカラ心配したんだヨ?」

あ、あれ?　なんで、みんなしてきよとんと

してるの??

「5日?」

「おらんやて?」

はづきちゃんとあいちゃんが、顔見合せてる。なんで?　

「みんな、これ見て!」

お互い顔見合せてたら、背中のはつから、おんぶちゃんの大きな声が聞こえてきた。

「これ、ただのカレンダーやん　うえ!?!」

あいちゃんが妙な声上げてる。カレンダーが、どうかしたの?　

「ももちゃん、今日つてまさか、6日?」

「え?ん、ウン。そつだケド　」

わたしが言ったとたん、みんなの動きが、止まった。

「うそ　」

「あたしたちが日本出たのつて、1日だよ?」

どれみちゃんとはづきちゃん、飛び出しそうなくらい目を見開いちゃつてる。わたしも、なんて言っ

ていいのかわからなくて困ってたら、背中からの
んびりした声。

「そうねえ。どうやら、5日あとのMAHO室につ
ないじゃったみたいね」

振り返ったらリリカおばあちゃんが、とびらのと
こに立ってむこうを指差してる。

とびらのむこう、ロッキングチェアのある部屋の
奥の、日めくりカレンダー。5月1日。

「ど、どーなってるの!?!」

「たまにね、思いつき開けちゃうところなるのよ。
今日はそおつと開けたつもりなのだけど」

あははは。ああ、みんな肩落として笑ってるわ。も
つ、変わらないひとだよな。

「それじゃ、とびらが閉じる前に戻らないといけな
いわね。本当は、一晩泊まるはずだったけど」

「ンなん、言つてもしやあないやん」

心配そうなはつきちゃんの肩、あいちゃんがポン
ポンって叩いてる。

「そうだよ。6日ならちょうどいいじゃん。このま
まお祝い、やっちゃおう」

ああ、どれみちゃんもだ。変わってない。みんな
がいるんだ。

キッチンに戻ったら、いつの間にかパーティ会場
になってた。

飾りつけはないけど、ローストチキンにフレンチ
フライとコーンサラダがきれいに並んでる。

「ももちゃん泣いてる間に、準備終わってんで。

へへ、時間のうて、簡単なモンだけやけど」

思わず顔が赤くなっちゃった。思い出させないで
よお。恥ずかしいんだから。

「ケーキは用意してないんだけど　これ？」

あ、いけない。作りかけのケーキ、片付けてなかつ
たんだっけ。

9 おかしなわたし

「あ、それはネ、その」

ケーキに駆けよろうとしてるわたしの前に、おんぶちゃんか割り込んできた。

「あと、この『Happy Birthday』のマジパンつければ完成、みたいね」

ああもう、おんぶちゃんがじゃまして、マジパンが取れないよあー！

「せやけど、なんや字いが余ってる気がしますん あ、おんぶちゃんが、あいちゃんの顔みてつなづいてる。さっき机に落ちちゃったしほり袋持って。」

「じゃ、ひとり一文字よ。まず、わたしから。『もね はい』」

マジパンに文字書いて、そのままあいちゃんに袋わたして。

「ほな、あたしも『も』やな と。ほい」

あいちゃんから、笑ってるはづきちゃんに。

「それじゃ、私は『ちゃ』 うん。はい、最後よはづきちゃんから、どれみちゃんへ。」

「あたしは『ん』？ えっと よっ、と。あ、リリカおばあちゃんは？」

どれみちゃんの声と同時に、わたしのわきからすつとカップが出てきた。

「はいはい。お茶をいれてきましたよ。それじゃ、マジパンのせて、ろうそく立てましょ♡」

もう。また、泣けてきちゃっじゃない。

バースデイソングを合唱してもらって、わたしがケーキのろうそく吹き消して。拍手されると、ちよつとテレちゃうな。

「みんな、ありがト。うん、やっぱり誕生日に一人つきりじゃないッテ、いいね」

ケーキの上の、マジパンの文字。うん、わたし、いまは一人じゃないんだ。

「あら、悲しいわね。モンローがいるじゃないの」

え？

顔を上げたら、リリカおばあちゃんにじっと見つめられてた。モンローって マジヨモンロー？

「バナナに聞いたわ。このMAHO堂を使う代わりに、毎月『心を込めたお菓子』作るそうね」

カタカタ、つて音がする。みんなはあわててるけど、わたしは見なくてもわかるわ。流して、ボールが動いてるんだ。

「みんなのお誕生日に、ケーキ焼いて贈って 自分のお誕生日ケーキに心を込めるなんて、難しかったですよ？」

みんなが、あつ、て顔してる。あ、あははは

「ねえ、ももちゃん。無理してケーキ作っても、MAHO堂は喜ばないわよ？」

リリカおばあちゃん、わたしの右手を両手で包んでる。これ、マジヨモンローがわたしに教えるときと、おんなじ

「一番喜ぶのは、あなたの成長した姿を見せること。」

ちゃんと友達と遊んで、勉強して その中でお菓子も作るのよ」

流して、ボールと泡だて器が踊ってる。 そばであいちゃんたちが笑ってるけど。

ほんとだ。なんで気づかなかったんだろ。『思い』じゃない。あれは このMAHO堂にいるの、マジヨモンローなんだ

とたんに、まわりがぱつ、て明るくなったような気がした。ポケットの中、ベスとサチコにもらったブレゼントがあつたかい。目の前にいるみんなが、大人っぽく見える !!

リリカおばあちゃんを見たら、いつも通り、のんびり笑ってる。そっか、ほんとに変わってないのは、変わるうとしてなかったのは、私だけだったんだ。

「姿かたちは変わっても、ここにはモンローがいるわ。伊豆のペンションに私がいるように、ね。いつかはももちゃんが、ここにいるようになる。そうなるよ、いいわね」

「きやああっ!!」

リリカおばあちゃんに、お茶注いであげようとしたとき、いきなり大声が上がった。

「ど、どないしてん、はづきちゃん?」

「と、とびらが、閉まり始めてるわっ!!」

え? ええっっ!?

みんなの視線が、奥のとびらに集まった。ほんとだ。さつきは思いきり開いてたのに、半分くらいになってる。

「ど、ど、ど、どしたら?」

「はづきちゃん、落ち着いて! ええと、ももちゃん。悪いけど」

どれみちゃんが言い終わる前に、わたしは食べ物の大皿にまとめてた。あいちゃんが空いたお皿とカップを端から洗って、それを受け取ったおんぶちゃんがバッグに詰めてる。

さすが、息ぴったりだわ。

「あ、その、え」と よし。はづきちゃん、あたしたちは、とびら押さえよ!」

大皿にラップかけ終わるのと、あいちゃんが洗い終わるのが、ほとんど同時。お互い顔見合わせて、くすくす笑っちゃった。

「止まんないい、急いで!」

いけない。笑ってる場合じゃないみたい。

大皿をあいちゃんが、バッグをおんぶちゃんが持つて、とびらのむこうへ走っていく。

「ほな、ももちゃん。またなあ」

「また、こんどね」

それでも、ちよっただけ振り返ってくれる。わたしは素直に「またね」って言えた。

「とびらのむこうに、いるわよ」

「いつだって、大親友だよ。忘れないで!」

はづきちゃんとどれみちゃんも、とびらに押されながらあいさつしてくれる。わたしは「元気でね」っ

て応えられた。

「おわかれなんて、ないんだ。わたしが、おわかれって思わなければ。」

「さあ、それじゃあ私も、おいとまするわね」

そしてリリカおばあちゃん。閉まりかけのとびらさつき、どれみちゃんたちが二人がかりで押さえてたのとびらを軽く開けて、悠々と歩いてく。

「リリカおばあちゃん、マジヨモンローに会いに来たんでシヨ？ わたしに時間とらせちゃってごめんなサイ」

背中に向かって謝ったら、閉まりかけのとびらが、びたっ、と止まったわ。

「モンローに？」

とびらを閉めながら、くるって振り向いた顔。笑ってたけど、ちょっとだけいたずらっぽい。

「そうね、モンロー 未来のモンローに、ね」

とびらが閉じた瞬間、マジヨモンローがくすくす笑う声が聞こえたような気がした。

未来の か。うん。いつか、なりたいな。

—おしまい—